恋人に呪われて転生したけど男に抱かれるのは御免だ①

プロローグ①

彼女に五股がばれて、泣かれた。
べつに惜しい相手ではなかったので、さめざめと悲劇のヒロインぶるのを放って、部屋から去ろうとしたら、聞こえてきた呟き。

「キーくんの体が、女の子を見て触っても、女の子に見られて触られても、興奮しない勃起もしない体になったらいいのに・・・」

負け犬の遠吠えながら、なんという禍禍しい望み。
すこし背筋が震えたのを強がって「は！俺も望むところだね！」と笑いとばせば、背後でがたんと物音が立った。

振りかえる間もなく、彼女にタックルされ転倒。
呻いて、瞼をあげた直後、馬乗りになった彼女が大きな鋏を掲げるのを目の当たり。

「ま」て、を云わせてももらえず、勢いよく鋏をふりおろされ、心臓を一突きにされた。
その瞬間、底なしの真っ暗闇に意識が放られたものの、すこしもせず、あたりは眩くなり、視界が開けて。

「大丈夫か、キー」と揺さぶられて、目を見開き、肩を跳ねた。

目の前には西洋風の甲冑をまとった金髪のイケメン。
背景は真っ青な空と、青青とした木木。

「勇者・・・」と呟いたなら、彼女に刺殺されてゲームの世界に転生したのを、とたんに理解させられた。

２Ｄのドット絵のレトロなＲＰＧ。
まだ二十代の俺は世代でないとはいえ、スマホゲームとして復刻したのを、最近、やりこんでいた。

云ってしまえば、本家の劣化版パクリ。
伝説の剣をぬいた、選ばれし勇者が仲間をひきつれ、魔王を倒しにいくという、ベタもベタなストーリー。
本家が全盛だった時代を知らない俺からしたら、昔のＲＰＧのテンプレ的なのが、ぴんとこないので、逆に面白味を覚えたが。

大枠の状況を飲みこんで、あらためて見やると、勇者のほかに、たき

火のそばに座る白魔導師の女の子と格闘家の男がいた。
初期のパーティーなら、あとの一人の俺は、踊り子。
パーティー入りした一番手だ。

勇者が伝説の剣をたずさえて旅をしだしたころ。
寄り道した町で複数の女に袋叩きされていたところに遭遇。
助けてくれたのを「恩を返すぜ！」とかなんとか調子よく口実をつけ、
勇んでついてくることに。

女遊びのトラベルメーカーとあって、女にリンチされても「自業自得」
と誰もが呆れて見限るのを「勇者のお前だけだ！俺を哀れんでくれた
のは！」と感動したから。
勇者に従おうと決めた理由は、もちろん、それだけではない。

救世主、勇者の仲間となれば、もっと女の子にモテる。
旅をして町を転転とすれば、後腐れなく遊べるし、痴情のもつれに巻きこまれない。
と、根っからの遊び人らしく下衆な発想もあってのこと。

とことん軟派なふざけたキャラなれど、戦闘に参加をする。
踊り子ならではの、舞いのモーションで蹴りつけるなど、一応、打撃攻撃も。
ただ、一桁のダメージしか与えられない。

白魔法でサポートする白魔術師と同様、非戦闘要員のくくりになる。
戦闘用にいくつか踊りのバリエーションがあり、それによって敵を眠らせたり、混乱させたり、眩暈を起こさせたり、誘惑して敵同士戦わせたり。

味方に向けて舞うことも。
逆に敵にやられての睡眠、混乱や誘惑を解除する、気力のゲージをあげる（たまると必殺技がくりだせる）敵の目を引きつける（ヒットポイントがあがる）などの有効的なサポートをする。

ほかにも妖精や精霊を召還して、その恩恵を仲間にもたらすとか、案外、役に立つとはいえ、効果が発揮される確率は低いから（白魔導師が九割なら踊り子は三割）ぶっちゃけ、いなくても困らないヤツだ。

まあ、生真面目な勇者、堅物の格闘家、清純な白魔導師だけでは、息がつまるような重重しい雰囲気になるから、ガス抜きをするという点では欠かせない、お笑い要員なのだろう。

プロローグ②

まあ、なににしろ、五股していた転生前とそうキャラが変わらず、なんなら、より女遊びに有利なセクシーな踊り子に生まれ変われて、しめしめとほくそ笑んだもので。
パーティーが町にたどりつき、一泊することになって、早速、夜の酒場に踊りにいった。

尻をふり、腰を突きあげて、酔っぱらいどもに、やんややんや手を叩かれ口笛を吹かれながら物色。
店員のカワイ子ちゃんが仕事をしつつ、ちらちら視線を寄こしたのに応じることにし、踊りきって投げ銭を拾ってから、彼女の部屋へ。

「さあ、転生セックス三昧ライフのはじまりだ！」と高笑いをしながら、ベッドに彼女を押し倒したものの、なにをどうやっても勃起せず。鼓動を早めて火照ることもなく、ずっと萎えっぱなしに、体もひんやりとしたまま。

「なにが俺の伝説の剣で、天国に誘ってやるよ！この腐った不能野郎が！」と彼女に蹴とばされ、外に放りだされた。
ズボンだけ身につけ、裸足でとぼとぼと歩き、すっかりしょげていたが、宿屋につく前にはっと閃くことが。
「前世の恋人の呪いでは？！」と。

「キーくんの体が、女の子を見て触っても、女の子に見られて触られても、興奮しない勃起もしない体になったらいいのに・・・」

俺の心臓を鋏で貫く前に、彼女が漏らした恨み節。
「いやいやまさか」と思いつつ、きびすを返し、若いお姉ちゃんとよろしくやる店に赴いたところ、まさかのまさか。

店一の美貌にしてナイスバディな女を前にして、前世のように胸が弾み、鼻息が荒くなることなく、腰を撫でても、俺の息子はしょんぼり。彼女に熱っぽい視線を送られ、太ももの際どいところを揉まれても、不感症になったよう。

結局、うな垂れて宿屋にもどり、ベッドに倒れたなら死にたくなった。大袈裟かもしれないが、いや、趣味がセックスといって過言でない俺には死活問題。

性欲が強いというより、セックスがスキ。
アイドルがスキと同じようなもの。

前世は五股していたほどだから、男として優秀だったほう。
なんでも、そつなく器用にこなして、要領よく人生を歩んでいたが、
情熱を注げるものを持たなかった。

うまく生きられても「これをやり遂げるために生きたい！」と駆り立てられることはなく。
云ってしまえば、生きるのが暇だった。

「セックスをするために生きたい！」とまでの熱意はないとはいえ、
最中は暇なのを忘れられる。
暇つぶしには一等有効だったから、なくてはならないわけ。

勇者との旅も、やり甲斐はあっても、セックス以上の暇つぶしにはならない。
戦闘やクエスト、お笑い要員の役目を適当にこなしながらも、退屈に体が蝕まれていった。

いや、日中はなんだかんだ忙しいから、気がまぎれるものを、夜はいただけない。
「退屈だなあ」と心の声がうるさくて、目が冴えるし、たまに勇者と白魔導師が消えるのに、いやでも察しられて苛苛するし。

じっとしていては鬱鬱とするばかりだから、白魔導師手作りの魔除けを持って夜の森を散策。

「一か八か、死んでみるか？

でも、呪いが引き継がれる可能性は高そうだし、下手したら、スライムやゴブリンとか、下等な魔物になるかも」

「だったら、今のほうが・・・」とぶつぶつと歩いていて、ふと足をとめた。

恋人の恨み言に、あらためて首をひねって「ん？」と。

「女に」「女を」と対象は女だけ。

俺はノーマルだから当たり前とはいえ、女以外は適用しないのでは？